

反戦高協

戦争と植民地主義に反対し生活と権利を守る高校生協議会
中央機関誌

別冊

■ 高校生運動と学内斗争

—大阪府委員会地区校における斗争報告—

元大阪府委員 杉正人

■ 反戦高協大阪府委員会前史

—日韓斗争を中心とする大阪における高校生運動

の総括とそこに内包される運動の発展の条件—

元大阪府委員書記長 山天夙

反戦反植民地主義
生活と権利を守るため
共に斗かわん

発行 反戦高協中央書記局

目次

高校生運動と学内斗争——杉正人

——大阪府委員会校に於ける斗争報告

第一章 斗争の概観

- 一、斗争の開始と背景のありか
 - 二、斗争の展開——文化祭不イコトへの目い
 - 三、オ一回抗議集会の分裂と戦術転換
 - 四、オ二回抗議集会（文化祭当日）
 - 五、文化祭以後の目い
- オ二章 八総括と今後の課題
- 一、大衆運動総括としての総括
 - 二、組織総括と展望
 - 三、（附説）運動確立のための一視角

反戦高知大脱許委員会前史——山沢原

——斗争中心とする大阪における高校生運動の概観と

△まえがき

と二に内容される運動の発展の条件

- 一、ぼくたちの知りたいてきたもの
 - α、高マル研の発足とその活動
 - β、日韓斗争のなかの高マル研
 - γ、高マル研から「反戦高知大」へ
 - 二、高校生運動の発展の条件
 - α、更にこれから何をなすべきか？
 - β、運動の発展とは何か？
 - γ、その具体的活動は果
- △あとがき

高校生運動と学内斗争

大阪府委員会校に於ける斗争報告

杉正人

の総括を述べ、それから毎年の抗戦運動を主として、11月17日の
な高校生運動の発展の「契機」として、これを記すこととする。

はじめに

われわれが、低迷する高校生運動のなかに明確なケルンを打ち建てて
一年半。既に戦後運動は高校生運動の主流としての位置を確保し、ますます
その中心は電線性を増してきている。

しかし、われわれの主体的力量と、運動の質の不充分から、「学内
界外の諸問題を真正に斗争として斗争解決していく大衆的組織の確立」と
いふ、戦時体制の中心スローガンと、その中心を打ち出される「大衆運動の
組織化」の理想は、オレオレに不十分と言わざるを得ない。特に学内斗争は
われわれの大衆性を不断に支えるものとして、最大の位置づけのなかで、
われわれの政治斗争が比較的大衆的に展開されていくのに対して、充分に展
開されていくとはならない。

われわれは組織的にその克服をめざして来た。オレオレには必ずしも
必要はない。その意味から、大阪府委員会の「他校校舎」文化祭をめざ
して来た斗争は、従来のわれわれの運動の限界を突破する半分の先駆
として位置づけられている内容を持っている。われわれは、この斗争

斗争の開始と問題のありか

「……この理由」によって文化祭をオレオレ参加は認められない。10月27日
の風体で行われた臨時（タラス）代表会議に於いて、自治会顧問教育が二
「声明」を出し、議案の議案は、一瞬、静かになった。一瞬で「オレオレ」
ンセンセを「オレオレ」代表の言、その時オレオレ、学内をゆるがした。オレオレ
メンタルが斗争が決定的に始まっていた。

しかし、文化祭をオレオレにのみして、突然の禁止声明は、言ひよりの
「既成の意思」を打ちたわれわれの心。いつか誰かそれ以後の斗争の進
展をオレオレをオレオレ。オレオレ。斗争は三田の範囲にのみならず
オレオレはオレオレの心。

オレオレ以前の状況は、斗争の萌芽がオレオレに存在していた。オレ
オレ、オレオレの過程をオレオレ。

実行のデモ、千々の職業に、根本原因があるのではなく、まさに、われわれが階級社会を大衆的に打ち出せなかつたという原因があるのだ。この問題は、新たな闘いが重なるかた形をわれわれがどうしている現在、階級社会の向題であるともいえる。あらゆる斗争において、大衆によって、必然的に行われる無言の絶頂をわれわれが受けとめ、明確な形をかきとっていくという作業が、今後進められねばならない。三年生の一部でみられた、フランス討論による議論の試みは、非常に重要である。新たな斗争を迎える、一、二年生活動家は、今後の闘いのなかで、あの斗争の意義を感じ込んで闘いを展開することが必要である。

そこで二年生は、フランス討論を組織するといふことの向題である。われわれの経験から、党内斗争はフランス討論を必要にして組織し得ないことは明らかならう。たゞこの経験が例外状況から導き出された自然発生的斗争であっても、それが進展する場合にはフランス討論は不可欠だ。なほフランス討論はどの意味を持つのか。いづれもなく、フランスにおいてひとつの向題（フランスは文化祭斗争）について意識統一を勝ち取るのがフランス討論の直接的意義だ。が、しかし、その意識統一には、フランス討論といふその場における下向的コミニケーションが不可欠なのだ。これは逆に表現できる。つまり下向的コミニケーションが、フランス討論の価値である。われわれは、単に意識統一の、直接的目的のために外部注入的な「アシティメーション」といふコミニケーションに頼ってはならない。むしろ、アシティメーションは、下向きな活動そのものでなければならぬのだ。大衆的斗争の進展は、大衆全体の下向作業による情況への怒りにまつて決定され、大衆斗争の価値はその下向作業が大衆全体によって、いかに日常

性の次に、定着、深化（リ思現化）されるかによつて決定する。われわれの目的は、大衆的意識統一は、下向コミニケーションによる。それが必要ならぬ。それが、大衆的意識統一であるためにも下向コミニケーションが不可欠なのだ。

これは、われわれにとってひとつの象徴的直観ともいふべき象徴的真理である。われわれの高校生活のうち、全力を注ぎこいた組織的斗争からの経験だ。何故、われわれはわれわれの向題提起が、フランスの交友の意図内部で外在的なものとして位置づけられていくという限界に立ちあがり、くやしい思いをしたのか。たゞその日韓斗争でも能研してこそ、それは、もうそれより先にあった「何くすん」によって準備が整った。たゞ「みんなさきさきさき」といふ、単なる呼びかけでは、決して突破できない、ひとつの壁としてあった。「何んが提起している向題はみんな重要なものだ。それなのに……」活動家なら、船心は毎日ひとつの心情を全燃しているだろう。しかし、それは、高校生における無関心、疎外された教育から生まれる意識の必然的な負荷なのだ。政治斗争においては、党内斗争より、更に一つ、下向コミニケーションは困難に感じられる。それは、政治が、単に、自治のまっぴり内面的自己から切り離され、そのところである大衆内部の状況ではなく、是以外のものも取り込まれた疎遠なものとして取り出されていくからに他ならない。われわれが政治斗争をより大衆的に闘うためには、日常的な下向コミニケーションが、ある程度まで蓄積されていくという状況がなければならぬのだ。ゆがいと、われわれの日常生活は、大衆からは単に外在的なもの、たゞそれ、疎遠な事実の集積のまっぴりそのとして位置づけられるに終つてまつ。われわれ

の心算の宣伝が、大衆には、「ふん、そんなものかなあ」といふ感じを受けとり、決して内在化されていくことができないのだ。マロウタリアートによって、単に力商品といふ下向的自覚が、革命的思想を持つべきこと、高校生にとって例外された教育の状況への下向は、その意味を持つことであり、まさに、その一点によつてのみ、高校生運動として教育斗争が特殊な重要性をもち得る。根拠があり、その精神的集約としてこの高校生が、われわれの運動全体のなかで、独自の意義を持つ。大衆的に展開される可能性を、存在論的に持つ根拠があるのだ。そこでこれが、われわれの運動全体のなかで、党内斗争が特殊な重要性をもつて位置づけられる根拠となるのだ。われわれ高校生全体としての普遍性、まさに高校生教育（疎外された）を、そしてまたまた反動化して（）を受けとれているかにかかっているが故に、われわれの運動の真の普遍性が大衆性は、党内斗争によって保証されるのだ。

二、組織的絶頂の展開

組織的絶頂は、一般にその斗争の目的として、組織の方針がいかに貫徹されたかに依つて行われるべきである。それは大衆斗争全体としての絶頂が普遍的絶頂であるのに対し、絶頂の特殊の契機である。（更に主体的絶頂はその個別の契機として位置づけられる。）

当然、われわれのこの戦術に依つて、おまひ活動家の組織的絶頂に依つて、また他階級との関係に依つて、絶頂の多岐にわたる。が、それによつて語らざるを得ない。斗争のオートマチックの文章の性格と組織的絶頂の長から、必ずしも意識のあるべきではない。従つてフランスは、われわれ

が、この斗争から得た組織的教訓を中心に、われわれが今後党内斗争を大衆的に闘うべきという向題提起を、その組織的方針と方法を、若干提議する。

この斗争をよりかえつて、まずわれわれが感じているのは、この斗争に作用した組織的作用の大きさを認める。この斗争のこの局面をどうしてか、われわれの組織的力量が、あらゆる意味において決定的な役割りを果たしている。この斗争は決して自然発生的に勃発したものでない。それは明確にみたように、われわれが提起した文化祭フランス参加といふ向題が各クラスにおいて討論され、自治といふ高校生独自の日常にまっぴり下向するといふベクトルが、われわれによつて導かれられた。その意義が大衆的に位置づけられたといふ、まさにわれわれの目的意識的働きかけによつて物質化された斗争である。もし、われわれが、自治の意義をつつてフランス参加自体の持つ日常性や自由意識を「ツール」するに依つて、この斗争は成立しなかつたであろう。更にまた、たゞそれだけでは成立しなかつたであろう。それは決してあつたような昇揚を伴ひ出で得なかつたであろう。フランスに依つて、否定的証明される。そのフランスは、全く自分自身に依るフランス参加の意義の下向的追求に、他のフランスに依るものかたは、娛樂的なフランス企画を組織したフランスである。更に、そのよつた傾斜の強かつた三年生、またフランスのこのフランスしかフランス参加企画がなかつた。一年生が、斗争局面において昇揚を伴ひ出で得なかつたといふことも、同じことが言えるのだ。もちろん、例外的事例もある。フランス参加企画がなかつたフランスが、斗争の展開のなかで、まさに自分たちがフランス参加

「運動の正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

「運動の正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

「運動の正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

「運動の正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

「運動の正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

「運動の正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。その「運動」の「正確性」の証明は、その「運動」の「正確性」の証明である。

1935.

「おもしろく」

「おもしろく」の証明は、その「おもしろく」の証明である。その「おもしろく」の証明は、その「おもしろく」の証明である。その「おもしろく」の証明は、その「おもしろく」の証明である。

「戦後植民地主義」

生活と権利を争うため



「反戦高揚」別冊

編集発行 反戦高揚中央書託局村岡紙部

発行日 一九六七・四・一

定価 三十円

連絡先 東京都世田谷区五―三―一七

TEL (四三六) 六六六 鈴木 義隆